子供から大人、若者から高齢者に至るまでのすべての人の文化を　1996年5月1日発行　[隔月発行]

文化高知

'96年5月　NO.71

「お城まつり」　一宮小6年　桧木　愛

(財) 高知市文化振興事業団

五年以上の別居

溝渕　悦子

今、民法の親族編に関する法律の改正案が、国会の審議に付されるか否か注目されている。この改正案の目玉は、何といっても法律上の婚姻をした夫婦が、同一の氏を名乗る必要はなく、夫婦がそれぞれの氏をそのまま使うことも認める夫婦別氏の制度を規定することである。新聞紙上でも賛否両論の意見を時々見かけるが、既婚の女性達の多くは、結婚後数年間は括弧書きの旧姓を付ける煩わしさを経験しただろう。しかし一方、新居にかかってくる電話で、思わず旧姓を名乗り、相手がドギマギすると同時に間違いに気付き、慌てて新しい姓を名乗る幸せを経験したかもしれない。賛否理由はいろいろあるが、この制度は、別氏にしたい人は別氏に、同氏にしたい人は同氏にと両方認めるのだから、新しい家族のあり方を見据えて、制定してみる価値は十分ある。二十一世紀の女性達は、どちらを選択するだろう。

それはさておき、今回の改正では、この夫婦別氏の注目度の陰に隠れて、女性達の生き方にとって、重要な改正がもう一つある。それは裁判上の離婚原因の一つとして、「夫婦が五年以上継続して共同生活をしていないとき」を新たに規定することである。離婚事件の相談にこられる誰もが口にすることは、結婚は簡単なのに離婚がこれほど難しいものだとは思わなかったという言葉である。かつて二人で幸せを噛み締めながら婚姻届に署名したことが、信じられない程の互いの愛情の落差、意地、世間体、子供をめぐる問題、夫婦で築いた財産の清算等、どれか一つでも自分の考えを固執して互いに譲らなければ協議離婚は難しい、冷戦状態にありながら、法律上の離婚ができない夫婦は、一階と二階の単なる同居人になるか、別居をして暮らさざるを得ない。このような事実上離婚状態である別居が五年以上継続していれば、二人の婚姻生活はもはや修復不可能だとして、たとえ一方が離婚を望まなくても裁判で離婚を認めるのである。

愛人の元に去った夫を諦めながらも、愛人への恨みと社宅を追い出されては経済的に困窮することから、中学生の子供をかかえ、かたくなに拒否している妻にとっては悲しむべき規定となる。なぜならこれまでの考えでは、「法はかくの如き不徳義勝手気侭を許すものではない」と判示して夫からの離婚の申し立てを認めなかった。しかし、これからは妻が離婚によって精神的、社会的、経済的に著しく苛酷な状態に置かれる場合は別として、夫は結婚という拘束から解放される。

他方、生活力がないうえに、酒を飲んでは暴力を振るい、嫉妬深い夫から逃れて暮らす妻には喜ばしい規定だろう。なぜなら家庭という密室の中での精神的虐待や暴力を法廷の場で証明することは非常に難しいが、五年以上の別居という客観的事実は、それに比べればはるかに証明しやすいからである。

賛否分かれるところだが、生活のため、子供のため、世間体、制裁、報復のため、壊れてしまった結婚にしがみつき、女を捨てて生きるよりは、女性として、母として新しい自分を発見することに前向きに挑戦するほうが、これからの女性の生き方だと私は思う。

ところで離婚率が常に上位を占めている高知の女性は、この規定を喜ぶ人が多いのであろうか、悲しむ人が多いのであろうか。

（弁護士）

自分自身の一歩から

西村　入道

私の職業は歌手。そしてプロフェッショナルなアーティストを対象とした、発声と歌唱のトレーナーです。

芸界においても、他のどんな種類の仕事でも同じで、一流といわれる人達はただならぬ緊張感と方向性を持っています。自己管理の能力も。

先日のこと、二十一歳の女の子に『ラブ』という歌詞を、日米混合してよいから、他の言い回しで十通り考えてごらんと言ってみました。

『エッ！ワッカンナァーイ！』

考えもしない！よくあることです。本人は本気でプロになるツモリというのが難しいところです。一方で、生まれ在所の言葉を絶対に崩さない面白い人もいたりして。

言葉も時と共に変化していくもの。しかし、日々耳にする、流行を共感するだけの短絡浮薄な言葉づかいと語彙の無さはなんとしても残念です。いわば、語り合う『共生』の願いの無い寂しさを感じます。

昨今のはやりの歌詞が、奥行きのないキャッチコピーの連発のように整理されるのも無理はないと考えてしまいそうになります。

人口が集中し、購買力も大きい都市部を標的とする興行界と出版界ですから、発表される音楽やその他の演じ物は自然とこれらのひとびとに向けて発信されるようになっているようです。裏付けが、有るのか無いのか判らないようなゴシップや中傷のニュースも含めて異常な情報渦。芸事の本体についてよりもその演者のキャラクターに衆目が集まる、といったこともしばしば起こります。

ヒット・チャートというものがあります。かってはクラシック・ジャズ・歌謡曲・ポップスほどの区別しかありませんでした。そこにそれぞれの覇者が登場したり、ビートルズのように『革命』を起こすヒーローが登場してきたわけです。日常を突き破るメッセージが、身近なラジオから飛び出してきたのです。共鳴した若者達は生身の友人達と音造りに励んだものでした。現代っ子のように、比較的安価になった機械を駆使して自分だけのメッセージを総めるのではありません。数少ない情報を必死で集め、何度も反芻して、真実とやらを捜しました。何としても自分自身を時の流れの中に見たかった。

現在では、クラシック・現代音楽・世界各国各地域の民族音楽とその他のヒット曲・歌謡曲・ポップス・演歌・ソウル・ロックでもプログレ・フレンチ・アメリカン等々、それぞれに大量の情報が飛び交っています。人々の連帯＝信頼の上に成り立った『口込み』情報は昔話になりました。現在では、情報王＝売上王です。

ひとつのビル全体がレコード店ということも珍しくなくなりました。自分の好みのジャンルのコーナーだけでも一週間は遊べそう。出版物も多重・多量・多方面となりました。自分の好きなジャンルの情報を追いかけるのに精一杯で、音楽一般の事をあまり知らないという人も増えました。生の声や生の楽器の素晴らしさなどを意識したことすら無く、ミュージシャン（という立場）を目指すなどという陳腐なこともおこります。

ハードウエアの極端な進歩普及。情報過多からくる個人の混乱と孤立。自分とは、日本とは、世界とは？

家ではパパやママが、学校では先生や友達がこうしてくれた。世間でもそう（でしょうね）？という問い掛けに答を探す。でもどこに行っても、自分の一歩から歩き出すしかないのです。そして、人の数だけ人生がある中で、世界中の皆さん方と『自分自身』でコンタクトしていくのが『人＝芸人』だと思います。

最後に大切な話をもうひとつ。特に歌い手の場合、外国の有名トレーナーに指導を受けて帰国したとして、日本語で歌う時には、そのノウハウを生かす知恵がなくてはなりません。人類学的に骨格・筋バランス等が違いますし、なにより言葉が違うのですから。〝外人〟さんになりたい病は、まだまだ蔓延しています。もしかしたらひどくなっているのかも。けっして若い者だけのせいじゃない。

（ボイストレーナー）

都市の文化はアンサンブル

ー「高知市文化振興ビジョン'95」の策定に参画してー

木津川　計

文化振興ビジョンがめざすもの

高知市が文化に力を入れる、というのである。文化行政がこれまで無策だったのではない。が、革新自治体は民生・福祉に重点を置くから、文化のハードづくりはどうしても後回しになりやすい。加えて、高知を襲った相次ぐ水害である。河川対策に市財政の相当部分を投じねばならなかった高知市の難儀も手伝って、高知の文化は他の四国三県に比べて見劣りしていたのである。

ようやく河川対策も一段落した。遅れをとった文化を振興させたい、と市長が方針を明示したのも行政課題の流れである。

昨年の五月、「高知市文化振興ビジョン策定委員会」が発足した。高知県建築士会専務理事の伊藤憲介氏を委員長に、他十二人が委員会に加わった。県外から一人を選べとなったらしく、思いもよらず私が指名されたのだ。郷里を離れて四十年。現状にうとい弱点は他の委員諸氏にお教えいただきつつ、ともかく昨年十一月、ビジョン原案を市長にお渡しさせていただいた。

十二月に成文化された文化振興ビジョンはこれからの基本目標に「みんなが輝く自由のまち高知」を揚げ、三つの具体的方策を定めた。

①人間らしさあふれる自由都市へ
②市民文化の創造都市へ
③個性と伝統を生かした文化観光都市へ

右のいずれも高知らしく、時代の要請に応えた方策ではあろう。

都市の文化はアンサンブルである、とは私が策定委員会で申し上げてきた観点の中心である。文化的個別事業の成否ではなく、産業、観光、生き甲斐、街づくりなど、都市や人間の全存在にかかわって文化行政は推進されなければならないのである。その観点にこんどのビジョンも立とうとしていて、策定の趣旨でこう述べる。

「迎える二十一世紀は、高齢社会の進展、価値観の多様化、社会の成熟化にともなって、さらに市民が自己実現の意欲を高め、生活の質の向上をめざすようになることから、これまで以上に文化がまちづくりの重要なテーマになると考えられます」。そうなのだ、まちづくりは文化の視点なくして構想し、実現されないと申し上げて間違いではない。

さらにプランをあふれさせよう

高知を長い間離れているから気づく自然の恩恵と、その合理的な活用策を私なりにいろいろ考えたものだ。鏡川を大切にするとともに親水空間としてもっと親しみたいと思う。新月橋から上流は、水泳に水遊び、キャンプや魚釣りにいくらでも楽しめる水辺ゾーンではないか。市域中心部の河川敷は野外イベントを開ける絶好のオープンスペースでもある。

川に親しむだけではない。魚が元気に泳ぎ、水質がよくなった江ノ口川の蘇生にいっそう力を尽くしたい。すでに成果をあげる市民運動に応え、行政は下水処理事業を強力に進める。将来はホタルの飛び交う清流に復元させたい。実現すれば、汚濁とメタンガスの死の川を再生させた自然回復作戦の誇るべき成功例になるだろう。あるいは、浦戸湾をロマンあふれる内海にしたい。五百人乗りの豪華客船を数隻周航させ、土佐湾をめぐってはどうか。いま水族館がおしゃれだ。浦戸湾に海底公園をこしらえては、と私は企画部の優秀なメンバーに呼びかけているのである。

さらに、日曜市を高知城と連動させ、人の流れをお城に向ける仕掛を編み出せないか。高知城をもっと活用するために高知城活性化会議を市民サイドで設立されんことを願う。

なにしろ四国三橋時代を展望しているのである。瀬戸大橋の開通で観

光客がふえた。何年か前、年間五百万人に達したと聞いて驚いた。二百万から三百万人だったのは十年ほど前の話だ。二十一世紀には、一千万人になろうと私は展望しているのである。本州から四国へ渡った人たちは四国山脈を突っ切り、太平洋に出る。必ず出る。観光行政にいまから万全を期してほしいと申し上げる。

産業もまた発展させねばならない。地場産業を育て、過疎地を蘇らせる方策はいっぱいあるはずだ。知恵を働かせるのだ。二十一世紀は知恵の時代である。プランをあふれさせ、希望をふくらませよう。

生涯学習社会をも展望して

このたびの文化振興ビジョンが「建設する」と明示したのは、市民総合文化施設と横山隆一記念館（仮称）の二つである。いずれも市長の選挙公約であったものやその後に意志決定がなされたものである。策定委員会の都度、首長の意向やプランがいかに強く行政に反映するかを痛感させられたものだ。

文化行政は夢を含み、ふくらませる。一見実現不可能と思えた企画でも実現して大成功を収めたケースはいくつもある。行政を動かし、議会を賛同させ、首長をその気にさせるには、市民の側のプランづくりを大いに進める。煮つめたプランを行政に提示する一方、市民サイドで可能なことから着手する。マスコミの支援も要請したい。行政主導の市民参加型ではなく、市民主導の行政参加型で文化を育て、発展させるルートを切り拓きたい。

こんどのビジョンで鮮明にし得なかった構想が一つある。急速に進行する高齢社会を横目に、生涯学習社会づくりも急ピッチである。確かに高知市には生涯学習施設として市民図書館、中央公民館、総合運動場などがあり、地区センター、文化センターなども公共施設として機能している。が、生涯学習にかかわる拠点センターとしてはいずれも小規模で部分的なのだ。市民総合文化施設を実現させたあとは、ぜひとも生涯学習拠点センターを構築させたい。

改めてビジョンの基本目標「みんなが輝く自由のまち高知」を思いみる。美辞麗句にとどめてしまっては七カ月をかけて編み出した甲斐もない。高知の太陽が明るく輝くように、市民も輝き、しかも自由の精神がみなぎっている高知をみんなの力でつくっていきたい。

（立命館大学産業社会学部教授）
『上方芸能』編集長

第12回高知市都市美デザイン賞講評

都市美の創造と市民感性の高揚

溝渕　博彦

第十二回高知市都市美デザイン賞の選考にあたり、作品の傾向と審査基準の考え方についてまとめた。今回は文化会館、老人保健施設、病院、集合住宅、展示場、本社屋など最近の社会情勢を反映した作品が推薦物件として提出された。

例年と比較すると、全体的に個性的な表現が少なく、意表をつく意匠、機能、構成があまり見られなかったものの、上位に残った作品は、それぞれ特徴的な感性により創作されたものといえよう。

高知市内には近年古建築の保存・活用から、新建築の提案までさまざまな傾向をもつ建築物や公園、それに付属する景観的環境が施工されているが、まだまだ都市美につながるまでには至っていないようである。この賞は市内の都市空間に刺激を与え、古いものから新しいもの、大規模なものから小規模なもの、建築の単位から群としての町並み、土木工作物の道路や橋から町並みの生け垣、壁画など多方面にわたる物件を対象とする。それらの魅力を引き出すためには、地域の技術者と施主の感性が大きく影響する。審査では、その場所性と、各作品の完成までの努力をも考慮したと考えている。

今回の推薦件数四十五件、一次審査では二十九件が選考され、二次審査で十二件に絞り込まれた。そして、それに引き続く選考委員会での真剣な議論の結果、恒石邸、細木眼科、轟組社屋、新京橋プラザ、チカミビル、福田心臓消化器内科が残った。それぞれが個性的で、地域環境に対しての主張もあるが、最終的にはチカミビル、恒石邸、新京橋プラザの三点が入賞した。特賞の該当作はなかった。

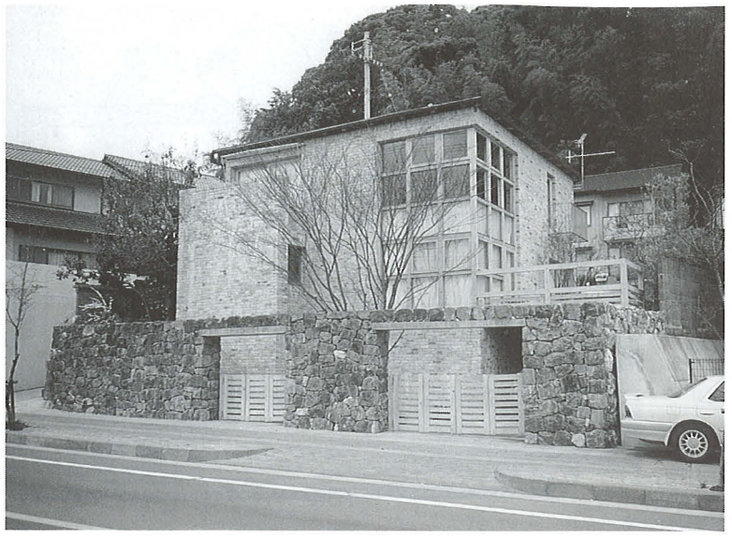
＊チカミビル
発注者　千頭不動産管理㈱
設計者　㈱千頭建築研究所

このビルは追手筋に面した鉄筋コンクリート六階建てのオフィスビルである。正面右半分に外部空間を取り入れて三角形の吹き抜けの構成で、一階のオープンスペースに緑化がされている。正面六段の大梁は三角形の吹き抜けに対する大担な造形をとり、追手筋に刺激を与える建物となっている。六階までを貫く吹き抜けとその下のオープンスペースは施主の意向を反映したとはいえ、思い切った手法をこのビルに導入している。ただ、これらの空間がエクステリア、インテリアの段階では必ずしも生きていないのではないかという意見もあった。

＊恒石邸
発注者　恒石三子
設計者　品原憲一郎建築研究室

この住宅は二車線の曲った坂道を上る途中で劇的に見えてくる。切り石の乱積みの石垣の向こうに古さを感じさせる耐火レンガ張りの壁で構成された住居は小規模だが、新旧の魅力を併合し和洋の新鮮な感覚をこの道沿いに与えている。白木枠の明かり窓が印象的なこの民家は、背後の山の緑と調和して親しみやすく、暖かさを感じさせるものとなっている。町並みと石壁との調和、それぞれの木部をバランスよくまとめたあげた作品である。石壁の持出しは不安定で不自然であるという意見もあった。

チカミビル


恒石邸

＊新京橋プラザ
発注者　高知市都市整備公社
設計者　荒木正彦設計事務所

全体をアルミで構成した建物で、中央公園とのバランスを考えて建築されている。中央公園とはりまや橋公園をつなぐ接点となる立地特性に沿ったシンボル性が大で、彫刻的な機能を持つ高知では数少ない建物といえよう。浮遊する鯨をイメージした彫刻的フォルムで、龍馬記念館と似た造形芸術性を持つものである。「中央公園とこの建物が将来的に調和するだろうか」「光った感じと公園とのバランスはどうか」「もっと思い切ったくずし方がほしい」などの意見も出たが、高知にない、他に刺激を与える建物として、次代のデザインの創造につながるものとしての評価を得た。

新京橋プラザ

第十二回の都市美デザイン賞の選考を終え、過去に蓄積された都市美の考え方や方法が、徐々にではあるが、全体に影響を及ぼしはじめていると感じる。県内には建築系、建設系、環境系の大学がなく、一般に都市美の考えが定着するにはまだまだ時間がかかるだろう。平成九年度開校の工科大学がその役割を果たすことになろう。大学から市民へ学問や感性が伝わるには、それなりに市民の感性を鍛えておく必要があり、そのための機関とソフトが大切であろう。高知市文化振興事業団、市中央公民館、市社会教育課、自由民権記念館などと、県の施設が合体したソフトを持ち、その役目を果たす必要がある。

高知市は平成八年度を都市美元年と位置付け、都市美の創出を柱に据える都市美条例を制定した。

まちを視覚的に美しくするだけでなく、地域のもつ歴史性や文化的要素と調和した景観、優しさや親しみが感じられる都市空間の形成を提案している。行政、市民、デザイナーが一体となった都市空間の創造を具体的に進めていく時代に入ったといえよう。

（日本建築学会四国支部常議員）

こども劇場と25年

大原寿美

「この頃新聞にこども劇場のことがよく出るね」と言われる。

高知県で最初のこども劇場が高知市に誕生したのは一九七一年、今年は二十五周年である。そう、二十五年に一度、四半世紀に一度くらい「よく出るね」もあっていいのではないかと思っている。

折しも、年明け早々から、高知新聞学芸欄には盛田勝寛クンの青春日誌が連載されたが、これがまるでこども劇場史外伝のような予想外の展開となり、私など毎日ハラハラさせられたものだ。

おとなと子どもが、お芝居や音楽を観たり聴いたりすることを活動の柱にしている私たちの会は、地元で創造活動をして発表される方々や団体に比べると、写真入りで新聞に載ることなどめったになかった。

弁当持参で賑やかに芝居見物をしてきた風習と異なり、西洋風の舞台鑑賞ということの価値が、まだまだなじまないこの国の文化のあり様であるかも知れない。

その「文化」という言葉も、最近では行政主導で語られるようになり喜ばしい限りだけれど、生活文化優先で、芸術文化はここでも肩身が狭い思いをすることが少なくない。

私は、高知こども劇場が発足の年に事務局に入り、今は四国四県三十二劇場の連絡会事務局の仕事をしているが、特に最近では、子どもを中心に据えた市民の文化活動にとっては、どうも大変厳しい社会環境にある。

そんな中で、私は、演劇や映画や本ほどに、いわゆる〝子ども好き〟ではないけれど、やはり、子どもは未来への希望そのものだと思うからそこにかかわる仕事をしている限り、楽しくしていたい。二十五年と言えば、公私ともに平穏無事であるはずがないけれど、高知こども劇場の二十五年は、私の二十五年でもあったと思うと、よしよし、ここまできたんだ、あとひと息しっかりおやり、と自分自身を励ましているきのうきょう。という訳で高知市に暮らす一人として、二十五周年特別企画の実行委員会に参加させてもらっている。

その特別企画は、これまでのこども劇場とかなり違ったものとなる。

第一弾は、三月二日に既に終わった。

県立美術館の能舞台で、演劇集団円（えん）による現代語訳狂言『くすくす　わっはっは』の公演である。これだけならいつもの活動と同じだが、レセプション公演（メインディッシュはお芝居で）と銘打って、「子ども向けの芝居なんかばかばかしくって……」とおっしゃる向きに、ぜひ一度と自信をもってお誘いした（子どもが見る舞台こそていねいに創られていないといけない）。ロビーには裏千家淡交会青年部のご協力でお茶席を設けた。桃の節句の前夜、いつもはしっちゃか走り回っているお母さんたちが、しっとり和服を着て、華やいでお客様を迎えた。「えっ、これがこども劇場？」といつもと違う雰囲気に、みんな何やらうれしそうだった。

第二弾が「一歳半の冒険」である。

「くすくすわっはっは」県立美術館ロビーにて

一歳半からの幼児とその親たちに、優しい人形劇との出合いの場をつくる。

デンマークから、ハネ・トロルさんという幼児のための人形劇専門家をお招きする。市内数カ所での公演と、子育てを始めたばかりの親とトロルさん、また幼児ご専門の方との語り合いやワークショップも準備していく。福祉や健康保健といった分野も、文化とジョイントしていくことに、これからの重要性を感じている。このとりくみについては、できれば高知市と協働の形がとれるといいな、と市役所の各セクションに協力や助成金のお願いをし、市の皆さんもお骨折り下さったけれど、残念ながらなかなか厳しそうである。

ハネ・トロルさん（デンマーク）

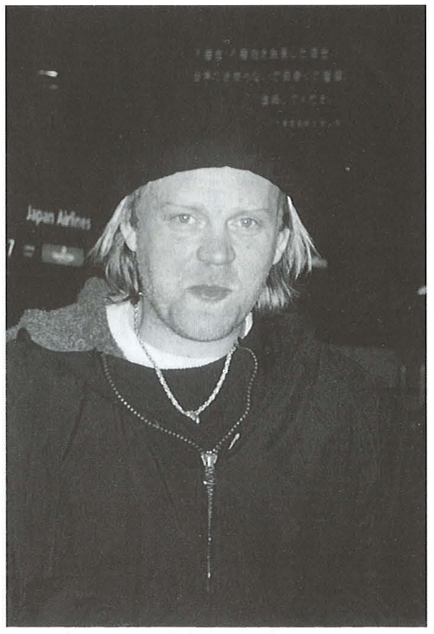
第三弾は、「マイ・ラブレター」。

これは、新聞に早やばやと紹介してもらったので反響も大きい。

〝死の手紙でなく愛の手紙を〟という副題のとおり、遺書を残して簡単に逝ってしまう子どもが後を絶たない今、生きてくって、結構、捨てたもんじゃないよ、というポジティブな指向で、県内の中学生、高校生に「ラブレター」を書いてもらう。それを専門の劇団員（『森は生きている』の劇団仲間から）が舞台に乗せる。演出は、昨年、一昨年と高知県内でも公演を行い好評を得たスウェーデンの演劇『小さな紳士のおはなし』の主役、クラウス・ハーテリウスさん。彼は、スウェーデン国内で、誰もが共演を望む最もすぐれた俳優のひとりで、この劇づくりをスウェーデン国内で行い成功した実績を持っている。サラエボでとりくむことも考えていると聞く。

俳優や演出家が、県内で協力して下さる学校の教室に直接入り、生徒たちとコミュニケーションを作っていくところから、作品に仕上げ、公演までの約二カ月間、高知に滞在することになる。音楽はできれば高知の方で、照明家はオーストラリアの女性で……と国際的な作品づくりでもある。

全国で初めてのこのとりくみは、高知県でのみ行う実験であり、全国的にも、演劇人や教育関係者から注目されている。幸い、高知県の行政サイドや高校文化連盟等が協力して下さることになり、助成金もおりそうであるが、まだまだ資金集めに多くの方々のご協力をお願いしなければならない。



クラウス・ハーテリウスさん（スウェーデン）

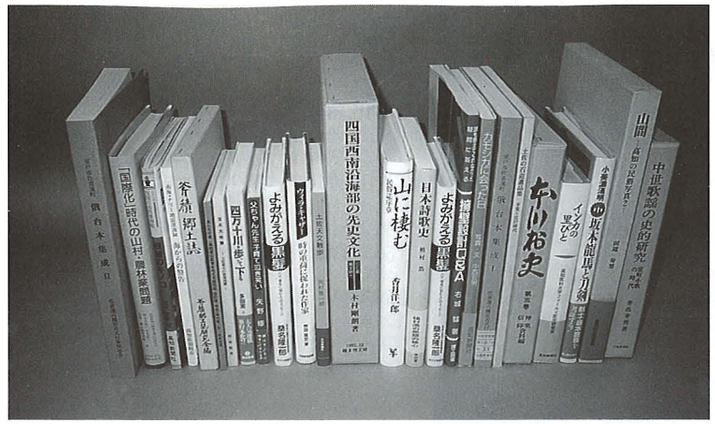
どんな舞台が見られるか、まだ想像すらできないけれど、中学生、高校生たちが、お国柄のちがいを含めて、演劇を職業とするアーティストたちと、まず幸福な出会いができることを祈っている。

イチロークンが「かわらなきゃ」とテレビの中から声をかけてる。時代は変わっても変わってはいけないものもある。もっとしなやかに……と期待することも多い。こども劇場は、非営利法人法のゆくえにもアンテナをのばしつつ、二十五年目からのスタートを開始したばかり。どうぞ応援して下さい。

（四国地方子ども劇場連絡会・事務局長）

第六回高知出版学術賞の審査を担当して

中内光昭



第６回「高知出版学術賞」への応募（推薦）作品

第六回の「高知出版学術賞」の審査が本年も三月に行われた。応募数は二十七点で、発足時の四十一点、第四回の三十九点に比べると多いとは言えないが、昨年の十六点に比べると満足すべき数と言えよう。

突出した作品はなかったが、いわば粒ぞろいで、本賞の存在や位置付けが関係者の間に定着してきたことを物語っていると考えられる。

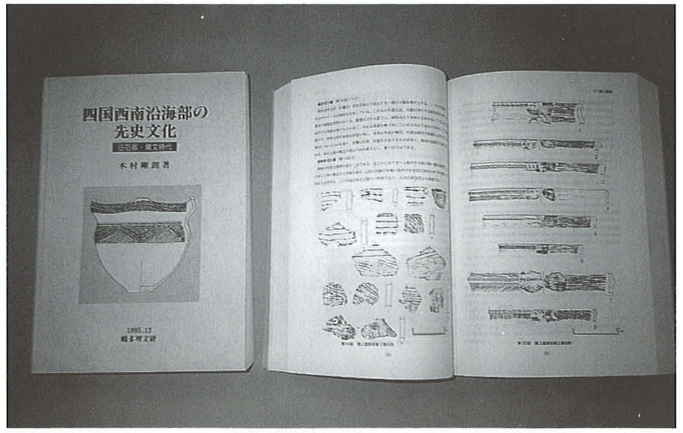
研究対象は、例年通り、人物、民俗、郷土史などを扱ったものが多かったが、地震対策や環境問題といった、自然科学と社会科学の両分野にまたがるような研究も比較的多かった。反面、純社会科学といえる研究はみられなかった。昨年皆無であった自然科学関係が本年は五点みられた。

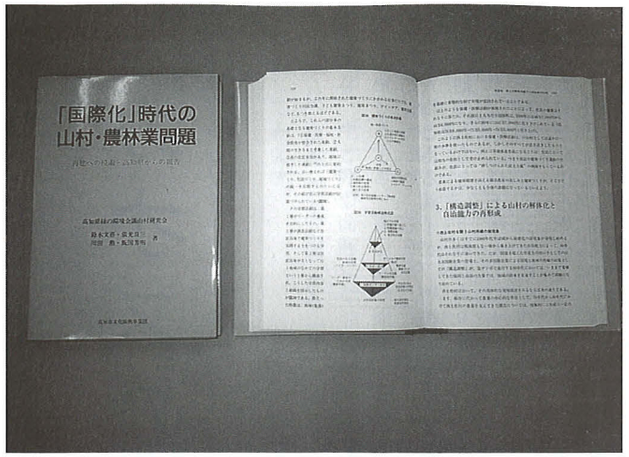
第一回の審査で一次候補十点を選び、各作品を数名の審査委員が精読後、それらの意見をもとに、二回目の審査で第二次候補として七点を残した。今回は全委員が揃って推す突出した作品がなかった反面、二次候補の七点はそれぞれに捨てがたい側面があった。

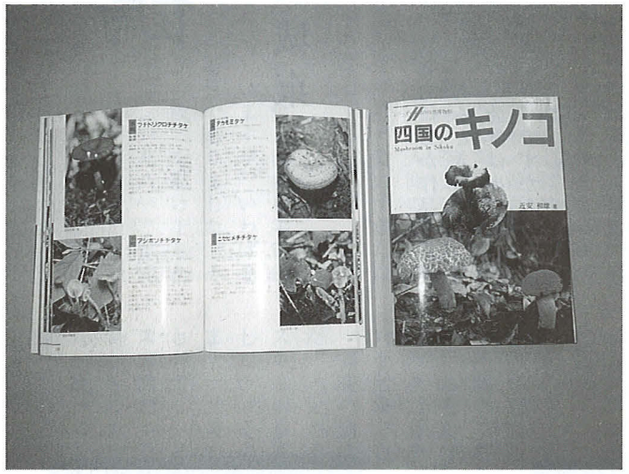
最終的には、本賞の趣旨に最も副うものを選ぶという視点から、全委員一致で次の三点を選んだが、選考にもれた四点も視点を変えると授賞作品に劣らぬことを付記しておきたい。

授賞作品は次の三点である。

木村剛朗著「四国西南沿海部の先史文化―旧石器・縄文時代」（幡多埋蔵文化財研究所刊）は、氏の前著「四万十川流域の縄文文化研究」（一九八七）の姉妹編で、当該地域六十三カ所の遺跡すべてについて克明な記録を行ったものである。氏は在野の研究者であるが、序文の賀川光夫氏の言葉を借りれば「数多くの資料を実測し拓本をとり、分類し、関連する数多くの論文や報告書を読み、広く縄文文化の研究者と討論し、しかるのちに妥当な考察を加える」という着実な手法をとった信頼にたる研究の集大成である。今後の研究にとって貴重な資料となりうるものと評価された。







「『国際化』時代の山村・農林業問題―再建への模索・高知県からの報告」（高知市文化振興事業団刊）は高知県緑の環境会議山村研究会の鈴木文熹・依光良三・川田勲・飯国芳明の四名により、三年がかりで行われた研究である。危機的状況下にある我が国の山村問題を、いわば本県をモデルに、その歴史的背景や現状を分析すると共に、問題解決に取り組む県下八町村の事例を報告、評価し、山村再生への提言を行ったものである。密度の濃い内容でありながら、記述は極めて具体的で、理解しやすく、一読して問題の深刻さを訴える力をもっている。問題のもつ今日的意義という面からも評価された。

近安和雄著「四国のキノコ」（高知新聞社刊）は、四国に普通のキノコを、産地での鮮明な写真を用いて紹介したものである。キノコは身近で食用にもされ、場合によっては生命にかかわる毒をもつ生物でありながら、ハンディーな解説書は少なく、特に四国全域を対象にしたものは本書が初めてである。近安氏もいわば在野の研究者であるが、研究手法も記載内容も学界に十分通用するものである。生時の色はもちろん、死後の変色、匂いなど、著者の豊富な経験に基づく解説も親切で、実用的価値も高いと評価された。

なお、惜しくも最終の選考にもれたのは、井出幸男書「中世歌謡の史的研究―室町小歌の時代」、高木啓夫編著「本川村史第三巻―神楽・信仰資料編」、香月洋一郎著「山に棲む―民俗誌序章」、桝田隆宏著「ウィラ・キャザー―時の重荷に捉われた作家」で、中でも井出氏の著書はその周到、緻密な考証が高く評価された。

内容的には多くの委員の注目を浴びながら、本賞の趣旨との関連で結果的に選考にもれた作品に槙村浩著（西森茂夫編）「日本詩歌史」がある。本書は郷土の天才詩人槙村浩が古事記、日本書紀、万葉集から現代詩にいたる流れを、人民の立場から分析、評価し、見事に当時の皇国史観を論破しているもので、二十三歳の青年の文章とは到底信じられないものである。六十年間行方不明だった原稿に日の光をあてた関係者に敬意を表したい。

なお選考は、今井嘉彦、瀬戸勝男、西島芳子、西野勉、吉竹博、依光貫之、の諸氏に筆者を加えた七名で行われた。

（高知出版学術賞審査委員長
前高知大学長）

カオスの鶴

山城東一郎

ある人物とある親子が、精神的な紐帯で結ばれるという例があります。詩人岡本弥太（以下弥太と記す）と夜須町西山の立仙父子がそうでした。

立仙義晴が城山小学校で教師をしていたとき、弥太に作文の手ほどきをし、こんどは弥太が夜須小学校で、義晴の長男、立仙啓一（以下立仙と記す）に作文などを教えました。

立仙は十代の半ばに、弥太の影響で「詩の茨の道」（弥太の造語）に踏みこみましたが、ふたりの詩性は異なるものがありました。どちらかというと弥太の詩は、北方的な暗溶感がつきまとい、逆に立仙の詩は、南方的に明色化されています。

ふたりが生前に刊行した詩集は、弥太が『瀧』一巻。立仙は『父の墓』と『春愁』の二冊です。

立仙は三十七歳で『春愁』を出して以後は、散発的にしか作品を発表していません。あるとき彼は、（自分や家族のための詩集は出さない）と、断言しました。ですから、没後に私たちの手に、『立仙啓一全詩集』が遺されたのです。

ところで、詩集『春愁』のあとがきで、「断酒の記念に第二詩集を出す」と宣言しましたが、ものの一年も経たないうちに、アルコホリズムを克服できず、〝酒仙詩人〟の名をほしいままにしました。

立仙の後半生は、鬱屈した心の捌け口をアルコールに求めました。そんな彼の〈孤愁の世界〉を理解していたのは果たして幾人いたでしょうか。

ある知名の画家が、「立仙は負け犬だ。どうしようもないぐうたら詩人だ」と、蔑むのを聞いて、私はムッとして、「とんでもない。あなたは何様のつもりですか」と抗弁して、胸のなかが寂寥感でいっぱいになったことを思いだします。

立仙は東京外語学校を終えましたから、西欧文学に造詣が深かったし、東洋の古典にも精通していました。

詩集『春愁』のエピグラフは、唐の詩人、買至の五言絶句を援用しているし、詩「薔薇の門を過ぎて」は、寒山の五言絶句の第二連「誰聞人作鬼　不見鶴成仙」を使っています。意訳すると、〈ただ人が死んで行くのを耳にするだけで、鶴が仙人になったということは見たこともない〉ということです。

およそ寒山（浙江省天台県天台山の清禅寺に住し、作詩三百余篇あり）は、人生の無常迅速を諦観した心境詩が多くあります。立仙の二冊の詩集を点検しますと、寒山詩の如く、無と実存。生と死が命題になっています。では、詩集『父の墓』から「寺」を抄記してみます。

あのひとはもう／骨壺へ帰って
十年。

不死の空だけが青い底無しの儘。
／すべて変った。／水と水が溶
けあうように何事もすぐ忘れ果
てて。やがて歴史も息絶えて。

つづいて詩集『春愁』の圧巻とおもう「風蝕 ― 弥太郎詩碑附近 ―」の、全篇三十六行を抜粋してみましょう。

おゆるしください。／酢のような
風の吹くなかで／これだけいわし
てください。／たったひとりの人
間さえ／わたしの指のあいだから
／砂のようにこぼれてゆきます。
（中略）
おゆるしくださらなければ／おゆ
るしのあるその日まで／荒磯の岩
蔭の花々よ。／くる年ごとに咲い
てください。／わたしは知ってい
る。／幾百年の昔も／幾百年の後
も／この酢のような風は吹き／砂
のように人は散り／空気はつねに
新しいことを。、／人間の夢はか
なしいことを。、／愛のすがたは
もろいものだと。

この詩は、永遠性と滅亡を宇宙的交感でとらえていますが、いわばそれが立仙詩の特質でありました。その彼が、〈滅びの坂〉を駆け下りたのは、昭和五十六（一九八一）年でした。

十二月八日の朝 ―――。立仙は、長女の嫁ぎ先の土佐山田町から、自転車で夜須町の自宅へ帰ろうとしたとき、三十余年前に、「きちがい酒をやめよとて／銀の小鈴をくれしひと。」（「ぎんのこすず」）の、銀のこすずを差しあげた長女から、（お父さん。きょうは寒いから、お家へ帰って飲んでちょうだい…）と差し出したウイスキーの小瓶を、立仙は鷲掴みにしてポケットに入れました。

そして、かつて「わが恥は物部川に流さん／わが夢は告ぐる人なし／わが犬はほゆ五月の空に。」（「はぢ」）と歌った、物部川の鉄橋付近にさしかかって、脳内出血で倒れました。

かつぎこまれた救急病院で、一旦意識が回復して「きょうは開戦（太平洋戦争）の日か……」とつぶやいて、ふたたび意識不明に陥り、四日後の十二月十二日に絶命しました。六十七歳でした。

通夜の別席で、長女から聞きました。「父の上衣のポケットに、ウイスキーの小瓶が封を切らずにありました」。その小瓶を、「形見にあげます」と言われたけれど、私は受けとらず、（そうだ。立仙さんはカオスの鶴だった。その鶴に、せめて一滴でものませてあげて、真っ青な寒天へ放ってあげたいのに……）と、思ったことでした。

（雑文家）

賛助会員募集中!!

会　　費　　年額　2,000円
特　　典　　①　機関紙「文化高知」を年６回お手元にお届けします。
②　事業団発行の出版物の10%割引（一部例外あり）
③　主催事業や刊行物の案内（マスコミ利用の場合あり）
〔※上記特典は申し込みいただいた日から１カ年有効〕
※お申し込み　①郵便振替 ②現金書留 ③直接事業団へ…
いずれの方法でもけっこうです。

ズームアップ

東南アジア

（4）

貴重な熱帯雨林

小林英治

昨年九月高知大学生物学科の山中三男先生を団長に市民の方々の参加を得て、安芸市の奥に残されたブナの天然林を見にいったことがある。急な山道を登った所に樹齢百年を超えるブナの大木が茂っているのを目の当たりにしたのは感動的であった。ブナは昔から薪や炭、家具、養蚕の道具などに使われてきたが、杉や檜を植えるために切られてしまい、高知県では残っているところが少なくなってしまった。

同様に熱帯雨林の破壊が世界的な問題となっている。この地球上で今日熱帯雨林が残っているのは三カ所である。南米ブラジルのアマゾン川流域にある地域が最も広く、これに次いではインドネシア、マレーシア、フィリピンを含む東南アジアの島嶼部、最後に西アフリカのコンゴ川流域である。年間を通じて雨量が多いこれらの地域では、高く茂った樹木が空を覆い、いわゆるジャングルを形成する。巨大な樹幹や板根がみられ、木々には蘭や籐（とう）などの植物が着生する。

東南アジアの熱帯雨林で多く見られるのはフタバガキ科の植物で、一般にラワンとして知られる有用材として利用される。このほか高級家具や彫像などに適する紫檀、黒檀、タガヤサン、チーク材なども産する。

有用な木材を得るため、熱帯林が異常な速さで切られていることが懸念される。特に不法な伐採や山地住民による焼畑耕作、過密な放牧、薪炭材としての過剰伐採、農地や道路・住宅地への転換、火災などによる森林地の破壊・消滅が進み、生態系に大きな影響を及ぼしている。国連食糧農業機構（FAO）の推定によると、世界の熱帯林は毎年一五四〇万ヘクタールも減少しているという。これは日本の総面積の四倍に当たる広さである。

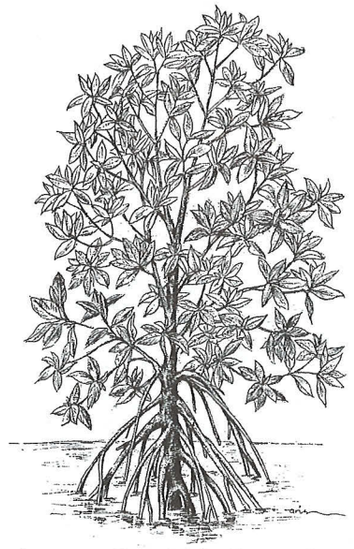
森林破壊のつけは開発途上国自体に回ってきており、一九八八年タイ南部を襲った洪水では死者四〇〇人以上を出した。森林が切られた結果はげ山が残されたフィリピンでは毎年のように大規模な洪水に見舞われ、尊い人命や財産が失われている。このため地球規模で森林を保護する必要が唱えられてきた。一九八七年国連の「環境と開発に関する世界委員会」が『われら共有の未来』と題する報告書を発表し、緑の地球環境を守る大切さを訴えた。

一九九二年ブラジルのリオデジャネイロにおいて開催された「環境と開発に関する国連会議」（通称〈地球サミット〉）では地球上の森林の保護を目的とした森林条約を制定しようとする提案がなされた。先進国側が熱帯雨林の破壊が地球温暖化の原因になっていると主張したのに対し、ブラジルやマレーシアなどの発展途上国は開発を進める必要上から規制に反対し、結局森林条約の構想は流れてしまった。

わが国は世界最大の熱帯材の輸入国として、主としてマレーシアやインドネシア、パプアニューギニアなどの森林資源に依存している。また日本が大量に買い付けるエビの養殖池を作るために、海岸のマングローブ林が切り倒されている。主としてヒルギ科の樹種から成るマングローブ林は浜辺の住民を海風から守り、住用の薪炭を供給し、さらに魚介類の繁殖場所として大変貴重な資源である。ここでも一部の人たちが経済的利益を得るのと引き替えに、貴重な生態系が失われているのは残念なことである。

「木の文化県構想」を推進する高知県民のわれわれとして、東南アジアを含む世界の森林資源の動向に無関心ではいられないだろう。

（高知大学人文学部教授）



マングローブの木

第12回写真コンテスト・高知を撮る入賞作品

高知を撮る

浜のわらべ　近藤輝代彦

遊び心

風俗歳時記

横山隆一画伯の珍奇記念物コレクションには遠く及ばないが、友人K君の「おもちゃ箱」にも半世紀にわたって収集した奇抜な代物が詰まっている。

同君愛用の逸品は、直径十センチ、厚さ三センチほどの白木の円盤。一見大型のコスターのようでもあるが、中心と縁（へり）の中間に五百円硬貨よりやや大きめの孔が一つあいている。「こいつの用途を当てたら百万円進上」と友人たちをからかってきたが、ついぞ正解者はいなかった由。

タネをあかすと、思い屈したとき、手持ちぶさたなとき、もの思いにふけるとき、くだんの孔に人さし指を通して、円盤をクルリ、クルリとふり回す。ただそれだけの単純素朴な玩弄物（がんろうぶつ）。だが、常識の枠組からひょいと脱け出したこの着想は秀抜である、とK君は言う。創案者の大西明さん（高知市在住）は遊び心溢れるこの円盤を「くるくる」と呼んでいる。

ギリシャの男たちがカフェで、独り黙然と、あるいは、仲間とお喋りをしながら、爪繰（つまぐ）っているという「コンポリア」（別名「たいくつの数珠（じゅず）」）などに比べると、既成品無縁の同氏の発想には脱帽の他ない。

郷土出身の芸能評論家木津川計氏は、従来の〈趣味人〉と対比して、〈新趣味人〉の擁護論を展開し、その資質と生き方を、(1)遊び心を活かし人と人とを結ぶ悠遊人、(2)時間的、経済的余裕に恵まれた悠裕人、(3)精神的余裕を持ち〈清福〉に生きる悠優人――という三点に要約している。（『趣味』の社会学）

横山画伯や、優悠閑適の日々を送りながら創意に富んだ道具や玩具を制作している大西さんは、まさに「新趣味人」の名に相応（ふさわ）しい方々であると思う。

さて、わが友K君は？〈時間（ひま）〉と〈遊び心〉は人後に落ちないが、〈経済的余裕〉皆無の素浪人。どうやら「たいくつの円盤」と戯れながら無為安逸の生を事とする〈C級遊民〉というところであろうか。

（朴）

書道研究「映光会」

かなの道を歩みつづけて

三浦　映泉

女性中心のかな書道愛好者の会です。月三回、競書誌の課題を練習したり、展覧会作品に挑戦したり、また月に一度、古筆の勉強会を開いて臨書もしたりと、主にペン字やかな書道の勉強をしています。

初心者からベテランまで、会員層も年齢層も幅広く、高知県展、女流展、また読売書法展など中央の書道展にも入選、入賞している者もおり、明るく、なごやかな雰囲気の中で、人の〝和〟を大切に、楽しく学んでいます。

美しいかな文字にあこがれて、かなの道を歩もうと結成した会も早や十七年になります。過日四月十二日(金)から十四日(日)まで高新画廊において「第一回映光会書作展」を開催いたしました。ペン字と毛筆の作品展で、ペン字の方はつけペン、ボールペン、竹、ダンボールなど筆具も思い思いに使用し、バラエティに富んだ社中展となりました。何分初めてのことで、不安でいっぱいでしたが、連日県内外から多数の方々がご来場くださり、大盛況のうちに終了することができました。

今回の社中展で得た経験、教訓を生かし、いただいたご温情を励みに、会員一同力を合わせて奥深い書の道を歩んでいきたいと願っております。

連絡先　高知市北本町二―二―二六
電　話　〇八八八―八三―六一九五

「ダンスクリーム」

勇気が湧く舞台創りめざして

大村　憲子

ダンスクリームは、四歳から六十歳までのスタジオ生（六十余名）を中心に、音楽・美術・衣装その他色々の専門家、愛好者（十余名）が一丸となって活動しており、昨年は公演「エスメラルダ」を成功させることができました。

現在は第二回公演「ジャングルブック」を創作中で、来る六月二日にオレンジホールでお目にかけます。

これは、狼に育てられた少年が逞しく成長していく冒険譚で、キップリングの名作。見所はストーリーがダンスで綴られる所、個性的な衣装、大胆な装置、オリジナル曲の数々、出演者一同の熱い想いでしょうか。

私たちの目的は、日々互いが刺激的であり、自己を磨ける鍛錬の場を持つ。頑張って生きている人々にとって愛と勇気が湧くような楽しい舞台を創る。この二つでしょうか。

私たちはジャズダンスの他、バレエ・モダン・タップ・ヒップポップとなんでも取り組みます。

また、音楽や美術、演劇や衣装などにも挑戦しています。興味のある方は一諸にやってみませんか。

連絡先　高知市知寄町三―四四―三
　　ダンスクリーム
電　話　〇八八八―八四―六一一九

第二回公演「ジャングルブック」
日　時　六月二日　昼の部　十四時開演
　　夜の部　十八時三十分開演
場　所　県民文化ホール（オレンジ）
入場料　前売三、〇〇〇（当日三、五〇〇円）

「高知アレルギー問題を考える会」

すくすく育てアトピッ子

山中　雅子

会が出来るきっかけになったのは、一九八九年小さな無認可保育所くれない保育園が主催した「母と子のアトピー教室」と題する勉強会でした。会場いっぱい参加したお母さんたちの姿にいかにアレルギー問題が深刻かを知らされました。そこで、共通の悩みやかかわりを持つ人たちに呼びかけ、「高知アレルギー問題を考える会」を発足しました。会の活動は、二カ月に一度の学習会と会報の発行です。そしてもう一つ、私たちが一生懸命に取り組んだのは「すくすく育てアトピッ子」という小雑誌の発行です。アトピーの子どもを育て悩んでいるお母さんたちに少しでも役に立てばと除去食の作り方や、各家庭での体験談をのせています。アレルギー問題が食物と深くかかわっていることを知り、神戸のポートアイランドの輸入食品見学や和食の見直しを始めています。

パンフレット「すくすく育てアトピッ子」

好評につき二刷発売中！

土佐弁　土佐日記

土居重俊監修　B6判・130頁・上製本
高知市文化振興事業団 編　定価 1,300円

紀貫之の名著『土佐日記』を、とさことばでつづるとどうなるか？古典を身近なものにするとともに、土佐弁にも親しめる楽しい本。

好評につき二刷発売中！

高知の森林

高知県緑の環境会議　森林研究会　編
B5変型・228頁　定価 2,500円

高知の代表的な山と森林をつぶさに探訪し、まだ残されている貴重な自然や植生のほか、森林と人々とのかかわりの歴史や、現地への道のり等も紹介。

散歩の途中で

青柳橋の下手、弘化台の防潮堤ちかくの川中に10メートル×14メートル位の土地がある。満ち潮時にも大丈夫なほどの高さがある。回りは石積みで固められ、堤の方へは石段さえついている。

現在はセメントづくりの小さな祠が建っているが、訪れる人はあまりいない様子。その昔、船旅の安全を祈願してお参りした所なのだろうか。

風伯

散歩考

まいにち四、五十分、散歩している。歩きながら何かを考える。散歩は、わたしの独り遊びである。マイカーの多いご時勢だから、つとめて危ない道を避けて歩く。

が、このあいだ自転車でお城下へ行く途中、いつものクセで、考えもってペダルを踏んでいると、ゴミ箱にブチ当たった。怪我がなくてよかった。剣呑（けんのん）。ケンノン。――

怪我といえば、亡くなった司馬遼太郎さんは、『空海の風景』を発表する数年まえの昭和四十五（一九七〇）年七月に、空海のことばかり考えながら自宅附近を散歩していて、交通事故に遭ったという。軽傷でヨカッタ。

考えもって散歩するのが習性になった、きようのわたしの話のネタは、次のとおり。

辞書に〝不動産〟は（民法上、土地及び建物、立木の如き土地定着物）とある。動かざるものが、土地であるが、例の財テク一辺倒のブームで、土地はコロコロ動き回った。

「きのう勤王　あしたは佐幕」サムライ・ニッポンの歌の文句じゃないがきのうは紳士づらした銀行屋、あしたはコワモテ・オッサンに、次から次へと汚れくさった手に、土地は動いた。――それで「住専問題」で激動している。サア、この始末どうつけるか。これを書いている只今はわからぬが、とにかく、「経済」が先行的に「政治」を支配すると、その不幸のツケは国民に回される。わかったかネ。政治屋どもよ。

（沌平）

毛筆の作品展で、ペン字の方はつけペン、ボールペン、竹、ダンボールなど筆具も思い思いに使用し、バラエティに富んだ社中展となりました。何分初めてのことで、不安でいっぱいでしたが、連日県内外から多数の方々がご来場くださり、大盛況のうちに終了することができました。

今回の社中展で得た経験、教訓を生かし、いただいたご温情を励みに、会員一同力を合わせて奥深い書の道を歩んでいきたいと願っております。

連絡先　高知市北本町二―二―二六
電　話　〇八八八―八三―六一九五

あり、自己を磨ける鍛錬の場を持つ。頑張って生きている人々にとって愛と勇気が湧くような楽しい舞台を創る。この二つでしょうか。

私たちはジャズダンスの他、バレエ・モダン・タップ・ヒップポップとなんでも取り組みます。

また、音楽や美術、演劇や衣装などにも挑戦しています。興味のある方は一諸にやってみませんか。

連絡先　高知市知寄町三―四四―三
　　ダンスクリーム
電　話　〇八八八―八四―六一一九

ます。

今、私たちが注目しているのは、保育園や学校での給食です。アレルギー児の症状は数年前より軽くなったようにみえますが、数が減っているわけではありません。成人のアトピーも深刻な問題となっており、まだまだ問題山積みのようです。

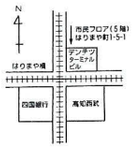
パンフレットご希望の方は、高知市鏡川町四十一くれない保育園まで送料用切手百八十円分を同封の上お申し込み下さい。

連絡先　高知市鏡川町四一
　　くれない保育園
電　話　〇八八八―七三―六七七二

市民フロアのご利用を

展示や会議に最適！

広さ・内装　96㎡壁面布クロス張り、スポットライト完備
所　在　地　高知市はりまや町一―五―一
　　デンテツターミナルビル5F



お申し込み
(財)高知市文化振興事業団
☎73―4365

SANKAIJUKU

山海塾

卵を立てること—卵熱

The Egg Stands out of Curiosity-UNETSU

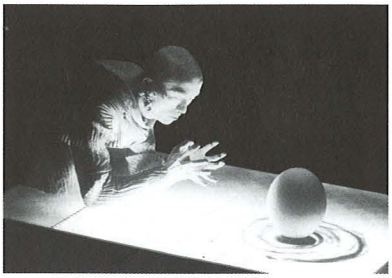
平成8年 7月6日(土)午後7時開演(午後6時30分開場)

高知県民文化ホール・オレンジ

入場料(全席指定・税込)

前売り　一般5000円・大学生以下4000円

※当日は500円増



主催　(財)高知市文化振興事業団
高知新聞社・RKC高知放送

共催　山海塾

●チケット　県民文化ホール・高新プレイガイド・チケットセゾン・チケットぴあ・高知音協・県立美術館ミュージアムショップ・高知文化振興事業団

●チケット発売日　5月2日(木)

●チケットの郵送サービス　お電話でお申し込みいただきますと、送金方法をお知らせいたします。入金を確認後、チケットを郵送いたします。※座席の指定はできません。送料(430円)が必要です。6月24日(月)到着分で締め切らせていただきます。

●未就学児童の入場はできません。

●賛助会員の方は前売りチケット1割引。(ただし、お一人1枚、事業団で購入の場合に限ります)

お問い合わせ＝下記文化振興事業団まで

"刺激的な舞台""衝撃の美"

世界最高峰のパフォーミング・アーツ、

四国初公演！

photo by Gan Fukuda

(財)高知市文化振興事業団
第11回市民フロア企画

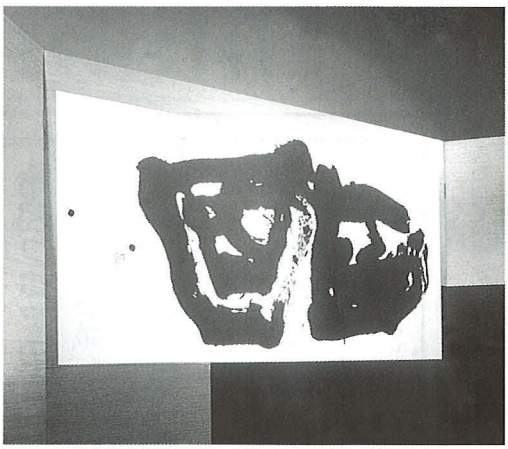
北古味可葉展
「あなたとわたし」

書家・北古味可葉さんの、いろいろな「面(つら)」の字を書いた作品約50点を展示します。是非ご高覧ください。

日時　平成八年五月一〇日(金)～五月二二日(水)

場所　午前一〇時～午後六時
市民フロア
(デンテツターミナルビル5階)

・入場無料



財団法人 高知市文化振興事業団　〒780 高知市本町5丁目2番3号　TEL(0888)73-4365
郵便振替01680-5-14869